特別企画 戦禍を逃れて四年

ウクライナ避難者が自ら語る「いま」、「これから」

帰国か定住か、厳しい自立への道

2/21(土) 13:30–17:00

（第2部終了後、交流・情報交換会あり）

対象者：ウクライナ避難者、支援団体・協力者、行政、メディア関連

場所：コモレ四谷タワーコンファレンス（四ツ谷駅徒歩1分）

［主催］公益財団法人 日本YMCA同盟

ロシアによる軍事侵攻から4年。停戦の道筋は困難を極め、見通しが立ちません。日本では現在1,956名のウクライナ避難者が生活しています（2025年12月末日現在）。これまでに危険を顧みず帰国や、第三国に出国した人たちが800名程度いる一方で、いまなお新たな来日も絶えません。生活基盤である日本財団を始めとする財政支援が3年を区切りにすでに終了。就労、日本語、メンタルなど課題を抱えるなか自立を迫られ、厳しい生活を送りながら「日本での定住か、帰国か」、心は不安のうちに大きく揺れ動いています。

YMCAは世界各地で避難者支援を行い、日本ではこれまで1800名の支援、来日渡航から生活開始・生活のあらゆるお困りごと・自立に向けた伴走まで行っています。

今回は、4回目となる独自のウクライナ避難者の大規模な調査結果と、あらゆる世代の当事者の声をわかち合い、私たちがこれから向かうべき道を共に探りたいと願います。

第1部 13:30–15:00

ウクライナ避難者が自ら語る「いま」、「これから」

オープニングアクト
避難者による劇団マーフキ（MAVKY）

1. ウクライナ避難者をめぐる全体概況報告
YMCAウクライナ避難者調査結果を踏まえて
（日本YMCA同盟）

2. ウクライナ避難者による意見提示
〈登壇者〉
ベルナツカ・ユリヤ　ウリバチョバ・イリーナ

3. フロアセッション
各世代の避難者が自ら語る「いま」「これから」

第2部 15:30–16:30

応答：私たち日本社会が問われていること

パネリスト（予定）

横山由利亜
（公益財団法人日本YMCA同盟ウクライナ避難者支援プロジェクト責任者）

小畑就平
（東京都 生活文化局 都民生活部 地域活動推進課 課長代理）

小野一馬
（NPO法人ビューティフル・ワールド理事／さわやかブルー代表／大分別府にて避難者受入れ）

榊原アレクセイツェヴァ ナターリヤ
（NPO法人日本ウクライナ文化協会／名古屋にて避難者受入れ）

山田拓路
（NPO法人メタノイア代表理事）

大森佐和
（早稲田大学政治経済学術院教授）

日本YMCA同盟

公益財団法人 日本YMCA同盟　〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2-11　Tel 03-5367-6640

YMCA みつかる。つながる。よくなっていく。

戦禍を逃れて四年

ウクライナ避難者が自ら語る「いま」、「これから」

「戦争が終わっても（停戦 / 急戦）、日本に残り定住したい、しばらく残りたい」（90%が回答）

「パート先で時間を増やしてもらえるだろうか」（就労者はパートタイムが大半）

「自分のキャリアはもうあきらめないといけないのか」

「帰りたくても、帰る家、帰るところがない」

「帰ると徴兵が待っている」

第1部登壇者紹介

ベルナツカ・ユリヤさん　（写真中央）
キーウ出身（50代・女性）

本国ではIT会社を経営し、息子を頼って単身来日。その後、母親、妹家族を呼び寄せる。避難しているエンジニアが経済格差や休業で本国の仕事を続けるのが困難、日本語が壁となって専門性を活かして就労することが難しいことを受けてIT技術を生かして就業するための研修コースを独自で開発、すでに実績が出ている。避難者の経済的な自立はもとより、自尊心向上、IT技術を通して日本社会への貢献も常に考えている。

ウリバチョバ・イリーナさん　（写真左）
スームィ出身（40代・女性）

国立キーウ大学を卒業後、弁護士として活躍。ウクライナ弁護士会所属。来日後は、千葉県に住みながら、日本人弁護士と共に、法律面での支援が必要なウクライナ避難者のサポートを積極的に行う。さらにウクライナの弁護士としては初めて「外国法事務弁護士」の資格を得て、今後は、復興に向けてビジネス分野でも法律の専門家として力を尽くしたいと考えている。自身も子どもがおり、多感なティーンエイジャーの居場所づくりにも注力する。

フロアセッション登場予定者

A・Bさん　キーウ出身（20代・男性）

16歳で姉と一緒に来日。両親はウクライナにおり、父は戦地で負傷してPTSDを抱え、母は医者。日本で大学進学を目指すため、複数のアルバイトを掛け持ちしながら日本語を独学で勉強する。将来は宇宙エンジニアになりたいとの夢を持っている。

E・Bさん　ハリコフ出身（30代・男性）

妻と幼児の3人でハリコフから石川県七尾市に避難。能登半島地震で住居半壊となり金沢に避難、その後東京に移住。ウクライナではプロのバスケットボール選手であったが、東京では求職に苦戦し一人コートで練習をする日が続いた。現在は、バスケットボールのコーチ職とアルバイトを掛け持ちしてなんとか生計を立てている。

N・Nさん　ハリコフ出身（40代・女性）

娘との旅行中に軍事侵攻があり帰国できずそのまま避難生活を余儀なくされる。心理カウンセラーの仕事をオンラインで続け、長引く戦争下でのストレスやトラウマの相談対応を行う。25年夏、ウクライナに帰国するも、爆撃が近くで続き命の危険を感じ、3ヶ月で再び日本に戻る。書道をこよなく愛す。

V・Rさん　キーウ（クリミア）出身（60代・女性）

娘を頼りに夫と来日、ウクライナでは歴史学者としてのキャリアを持つ。来日当初はひきこもりがちであったが、手芸やアクセサリー作りにチャレンジし、地域のお祭り等で販売。25年夏に夫が単身で帰国。公的な財政支援が終了し、現在は少ない預貯金を切り崩して生活、それもすでに限界を迎えている。

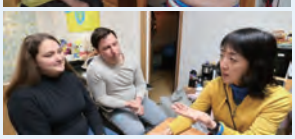
YMCAウクライナ避難者支援プロジェクト

2022年3月当初から、ウクライナから日本への来日避難を、グローバルネットワークを用いて展開。同年4月には在日ウクライナ大使館から依頼を受け国内の避難者支援、7月からは東京都と協定を結び、都内に集中する避難者の生活の見守りを行う（「東京都ウクライナ避難民マッチング支援事業」）。これまで戸別訪問・面談を行って来た避難者は1800名を超える。

民間NPOとして、これまでの国内外の人道支援・紛争/災害支援のノウハウをベースに、一貫して一人ひとりに伴走し、人間同士の深いつながりを大切にし、息の長い支援を行っている。2025年10月はウクライナを訪問し、全土で活動するウクライナYMCAの総会にも出席し、活動報告を行った。

YMCA ウクライナ募金 避難者支援

ウクライナ避難者支援
活動紹介・募金ページ



2025年度も戸別訪問を継続。経済的困窮から心身の健康まで、相談は多岐にわたる。

2025年6月
日本で避難生活を送るウクライナの学生2名が、全国のYMCA代表者が集まる会議でいまの心のうち、夢を語る。

2025年8月
毎年恒例、小中学生を対象とした絵日記、自由研究、ドリルなどの宿題サポートをボランティアの方々と共に。

2025年12月
児童劇団の鑑賞とウクライナのサンタ聖ニコライと共に楽しいクリスマスを過ごす。